2016 第二回 5/13

「社会の中で生きる原則」

本当に爽やかな五月晴れで良い天気が続いております。今日は新年度に入って、新入社員の方もいらっしゃるでしょうし、また年配の方々も、もう一度やっぱり社会の中で仕事をするということの意味を確認して、常に原点を忘れずに、初心を忘れずに仕事を続けてもらいたいという風に思いまして、今日は社会の中で生きる原則というテーマでお話をさせてもらうことにしました。レジメにも書いてあるんですけど、まずは社会とは何かっていうことについて、社会に出て仕事をするときによく考えておいてもらいたいという風に思っておるわけであります。社会というのは、基本的には秩序を持った人間関係の世界というものが社会という風に言われるものではないかと思います。だから人間関係の世界に秩序がなくなったら、社会は崩壊したと、言われますので、社会とはなんなのか？というものを手短に申しあげれば、社会とは秩序を持った人間関係の世界という風に理解し解釈することができるのだろうかと思うんですね。だけども、残念ながら今日の社会の現状を見渡せば、様々な領域で人間関係の崩壊というものが進んでおりますし、また社会の秩序を乱すような不正なことが経済界においても、いろんな世界で、芸能界においてもスポーツの世界においても、とにかく政治の世界においても、いろんな領域で人間社会の秩序を乱すような行為が、毎日出てきて話題になっている。そういう現状があります。そういう意味でまず社会の中で生きていく上で、まず最初にどういうことを心して仕事をしなきゃならんかってことを考えていきたいという風に思うわけであります。

人間関係が壊れてしまうということの直接的な原因という風に言うことはできるのは、三つありまして、それは人間関係に関わる場合に愛の心遣いを忘れてしまって、理屈だけで人に対応するということが、案外と仕事の中で多いんですよね。愛の欠如は理性的に相手を責めたり、批判したり、注意したり、叱ったりということが多くて、そういうことが先立ってしまって、相手に対する思いやり、心遣いってものが全く人間に対応する場合に言葉として態度として示されない…それが「なんかむかつくよな」っていうそういう気持ちを相手に与えてしまう原因になってる場合が多い。実際問題、仕事の中では時間的な余裕がない、気持ちに余裕がないってこともあって、ついつい直接的にも叱ったり、注意したりということをしてしまうんですけど、それが人間に深い遺恨を残す、恨みの気持ちを催させるような、そういう場合が現実的に非常に多いわけであります。

表面的には人間関係をうまくやっていると見えても、腹ん中では、顔は笑っていても心はムカついてる、というような感じで会社の人間関係が、もしあったならば深刻な問題で仕事がうまくいくはずはない。恨みのある人間に対して何か仕返しをしようってことで、仕事上も何かしら相手に不利なような行為をとってしまったりということもあったりなんかします。

まず人間関係が壊れていく直接的な原因というのが、愛の欠如。理屈、理性ばかりが先立って、まずは相手に対する思いやり、心遣いってものが出てこない。そこに人間関係は非常に深刻な問題になってしまうという原因の一つがあるわけですね。

で、もうひとつ、2番目は愛の未熟さと言うんですかね。愛というものは、求める愛から与える愛へと成長していく。愛されたいという思いが強いと、いくら相手に親切にしてもらったり、色々好意を持った対応をしてもらっても、まだまだ物足りないという意識で、ついつい相手が自分にしてくれることの程度が、まだまだ足らんという不満をぶちまけて、そして相手を責めるような、そういうことはよくあります。

夫婦関係でもそうですけど、会社の中での関係においても、愛されたい気持ちが強いと、ついついまだまだというそういう気持ちがあって、相手に不満不平を言うということがよくあるわけであります。人間とは小さい間は愛されたいという気持ちが強いんですけど、成長すればするほど、特に結婚して子供ができて親なれば、求める愛よりも与え尽くす愛、与える愛、愛を与えて見返りを求めない…そういう愛に、人間の愛はだんだんと成長していくのが、普通の愛の成長の仕方です。

だけど与える愛、お客様の役に立ちたいとか、会社の役に立ちたいとかそういう人の役に立ちたいという、そういうことから来る喜びよりも、年をとってもなおかつ愛されたい、愛に不足を感じる、そういう状態で年をとってしまう方も随分といらっしゃるわけですね。そういう意味では、社会に出れば愛されることよりも、むしろ人の役に立ち、愛することの喜び、役に立つことの喜び、そういうものをだんだんと自分のものにしていく…そういう心掛けを持っていなければならないんじゃないかという風に思います。

愛の欠如、未熟な愛、それからもう一つは、身勝手な愛、愛が人間関係を作る力ですよね。男女の愛、夫婦の愛、親子の愛、兄弟の愛、師弟の愛、友情、いろんな人間関係は全て愛という原理に基づいて絆が結ばれていくということになっています。人間関係の基本は愛であります。壊れてしまうことによって人間関係に問題が生じる。多くの人が愛に悩み、愛に苦しむという、そういう状態に今、陥っているわけですよね。そういうことになる直接的な原因がまずは愛の欠如、2番目が未熟の愛。最後の3番目が身勝手な愛。これは、自分を愛してると言ってるんだけど、相手がその愛を感じてない。そういう場合が、非常に多い。上司は部下のことを考えてるって言ってるんだけど、部下から見たら全然その上司は自分たちのことなんか考えてくれてない…そういう風な思いがある。また家庭でもお父さんお母さんが子供を愛しているって言ってんだけど、子供から見たらお父さんお母さんなんかぜんぜん俺のことなんかわかってへん…その親に反抗する。そういうことが色んな人間関係の中でよく見られるわけであります。これが身勝手な愛。愛してるつもりの愛。これもよく見てみれば、日常様々な人間関係の中で見られる現象であります。そういうことが、意思の疎通、心が通じ合わない、心が通い合っていないという状況で人間関係が壊れてしまうという原因になってくる。とにかくは、人間関係が壊れていくっていう直接の原因としては、愛の欠如、未熟な愛、身勝手な愛というものがあると。これらを意識して自分自身の日常の人間関係のあり方をよくよく考えてみてもらいたいという風に思うわけであります。

社会秩序の崩壊が進んだら、今申し上げた三つのことも個々の人間関係における問題が生じる原因という風に言うことができるわけですけど。だけどまあ、社会的な犯罪行為あるいは現在も三菱自動車のデータの偽装などもあったり、秩序をちゃんと守って、約束を守ってちゃんとしなきゃならないところで、それを守らずに違ったことをしてしまう…あるいは会社の中でも問題があっても、それを隠蔽体質、問題はあってもそれを上司に言わない。問題があっても言わない…そういう隠蔽体質も社会においていろんな問題が出てくる原因としてあります。また税金の問題でも、事業していても所得税が…利益を移してしまって…など、そういうことも社会の秩序ということからすると、やはり混乱をさせる原因になってくる。

経済界でも政治の世界でも、賄賂はあるし、いろんなことで社会の秩序っていうものを破壊し、混乱させるという風な、そういうことも出てくる。社会の中で生きるって事は、基本的にお互い役に立ち合うという関係性で社会ってものは結ばれておりますので、お互いに役に立ち合うってことは、自分だけが得をして、他の人に損をさせたり、迷惑をかけるようなことは社会的には一応悪という風に言われて、そういう心根は悪い、と言われるわけであります。あまりにも自己中心的な利害損得に関わるようなそういう行為を平然とやってしまう…あるいは問題を感じないで行ってしまう…そうならないように、社会の中で生きる上ではよく注意していないといけない。皆にとって公平かということが、社会って言うのは常に大事にしていかなきゃならないので自己中心的な自分だけの利害に基づいた行動とは、ちょっと控えないといけない。おかしいんじゃないかなと思うような、そういう気持ちも社会に中で生きていくには、非常に大事な精神じゃないかという風に思います。

それから社会の中には色んな性格の人、いろんな考え方の人、いろんな価値観の人がいて、いろんな宗教の人がいてというように、それが社会の実態なんですよね。これからは特に個性の時代と言われていて、考え方が違ってもいいんじゃないか、性格が違ってもいいんじゃないか、価値観が違ってもいいと、個性を認めながら生きるっていう、これからの世界の方向性であります。我々は社会の中で生きる時に、どういう気持ちを持って、社会の中で活動しなきゃならないかということ考えていきますと、これまでは理性的に同じ考え方の人ばっかり集まって、考え方の違う人を排除して、価値観が違ったら一緒に仕事ができるはずはないよね、考え方が違ったら一緒にやっていけないよね、そうだよねと言って、これまでやってきた。それは、理性に基づく、心理はひとつという理性に基づく考え方である。理性とは矛盾を排除する、確実性を必要とする。理性的な生き方や仕事の仕方をすれば、確実に考え方のやつを排除する。価値観が間違ったら一緒にやっていけない。感じ方が違ったら、一緒に生活できない。そういうことになってしまうのは理性の奴隷と化した、人間性を見失った醜い人間の姿であります。だけど、これからは考え方が間違っても、価値観が違っても一緒に仕事をしていく努力をすることが要求される…そういう時代にこれからなってきてるし、もうそうなってきてるし、これからますますそういう風にやっていかないと、社会の秩序、世界の平和っていうのは保てないわけですよね。しかも、考えた方が違ったら一緒にやっていけないのでは、もう離婚の激流は止まりようがない。これからの時代を生きて、これからの社会を生きて行こうと思ったら、どうしても価値観が違っても考え方が違っても人間性、性格が違っても、一緒にやって行こうという気持ちが、求められてくる。だけども、理性で生きておれば、理性は、真理はひとつと考えるから、ふたつ考え方があったら、どっちの考え方が正しいか決着をつけようとなってきます。ですから理性で生きておれば、考え方の違いは確実に対立になり、喧嘩になり、戦争になる。理性的に行けば、最終的には人間を苦しまなければならない。だけど現実は、考え方が違っても、価値観が違っても宗教が違っても一緒にやっていかなきゃならないよねっていうそういう要請が強く時代から出てきてるわけであります。

そのためには理性で生きたら考え方の違ったら一緒にやっていけないから、理性よりもより高度な力がこれからの人類には求められることになってくるわけですね。どうしたら考え方の違う人と一緒にやっていけるのか？ 社会に出れば、これからは考えていかないと、仕事においても成功しない。良い人間関係を増やしていくってこともできない。そこで考えなきゃならんことは、社会の中で生きるために社会が人間に求めるものは何なのか？と言ったら、社会性という言葉なんですね。社会性。社会性があるって事は、性格が違う人も一緒に仲良くやっていけるっていうのは、社会性がある。性格が違ったら一緒にやっていけないとは、社会性がないっていうんですよね。同じように宗教が違うから戦争してる人は、これは社会性がないんです。価値観が違ったら一緒に仕事ができないって言って、価値観の違う人をむやみに排除するというのも社会性がないんですね。相手が自分と同じように考えてくれないと一緒にやっていけない、という人は実は自分の考え方しか認められない、許せない人間なんですね。同じ考え方の人でないと付き合えないってことは、相手が自分と同じ考え方になってくれないと一緒にやっていけないという人は、自分しか愛せない人間なんだ。自分の考え方しか許せない、認められない人間なんだ。自分しか愛せないという、こういう理性化された愛というのは偽物の愛。

愛とは、基本的に種族保存の欲求という本能が生命に誕生することによって愛という精神が生まれ出ることができましたね。基本的に種族保存の欲求というのは。男が女を愛し、女は男を愛する。オスとメスが別れて、そして生殖活動をして子孫を残していくという本能に愛の原点がある。

自分しか愛せないような愛は偽物の愛であると言わなければならない。だけどそのことに人類は気づいていない。価値観が違ったら一緒に仕事ができるはずはないよね。そうだよねって言ってることは、実は自分しか愛せない、自分のことしか許せない、自分しか認めない、そういう人間であると自分が宣言してるようなものなんですよね。だけど、この愛の原点を考えれば、違うものを愛するということによって、愛というものは現実的に子孫を残す活動として成り立つんだということを忘れてはならない。今我々が愛と言っているものは実は理性によって歪められて、理性によって魂を抜かれた偽物の愛ということを考えてみないといけません。自分と違う考え方の人と一緒にやっていけない人は、自分しか愛せない、自分しか認められない…そういう愛なんです。それは社会性がないんですね。これからの時代の社会を生きて行こうと思ったら、我々は理性化された愛というものを本当の愛に戻して行かなければならない。社会性というのは、考え方が違っても一緒にやっていける。あるいは、考え方の違う人とでもどうしたら一緒にやっていけるんだろうと考えることが愛なんだ。それが社会性なんだということを、社会に出れば、まずはちゃんと自覚しなければならない。最近は、社会性って言葉がほとんど使われなくなってしまいまして、あまり社会性というものを意識しないで、みんな仕事をしてしまっておる。価値観が違ったら一緒にやっていけない、考え方が違ったら一緒にやっていけない、性格が違ったら一緒にやっていけない…そういうことを肯定してしまってるわけですよね。本来社会を生きていくために社会性っていうものが要求される。社会性がなかったら社会の秩序は作れないわけですよね。だけど今の時代は、残念ながら人間がその社会性という意識を見失ってしまっておる、そして理性的に生きることしかできなくなってしまっておる。ここに時代が要請するこれからの時代に生きる人間の生き方と、今我々が持ち続けておる社会性のない、自分しか愛せないような理性的な愛というものとの間に大きなズレがあって、そこで色々悩んでるという状況が、出てきてるんじゃないかなという風に思います。同じ考え方の人としか一緒にやっていけないって言う人は、社会性がないんだ。身勝手の愛なんだ。自分しか愛せないような愛なんだ。これは間違った愛だってことをまず我々は自覚しなければならないと思います。

これからはどうしても離婚の激増を食い止め、平和な世界の秩序を作って行こうと思ったら宗教違っても、価値観が違っても一緒にどうしたら仲良くやっていけるんだろうってことを考える、理屈を超えた愛の力が、これからの時代の人類には求められるんだってことを考えながら、我々は今の社会を生きるってことをしていかなければなりません。

職業の発展っていうのも、基本的には素晴らしい人間関係をどんどんどんどん増やしていくってことによって職業も発展するんですよ。仕事において成功しようと思ったら、素晴らしい人間関係を作り続けていくって努力をしなければなりません。その意味においても素晴らしい人間関係とは、現実的には考え方、価値観の違う人ともちゃんと仲良くやっていけるとい、そういう力が求められわけですね。

愛は理屈を超える力だ。理性では考え方の違う人とやっていけない。だけど、愛は考え方の違う人とどうすれば一緒にやっていけるんだろうと考えることが愛なんだということですね。我々ははっきりと意識する必要があります。なんで我々は考え方が違い、宗教が違い、価値観が違う人と何でケンカしないで仲良くやっていかなければならないのか、その根拠は何なのかって言ったら、我々の命から湧いてくる欲求っていうのは、できることならみんなと仲良く信じあって生きていきたいという欲求なんですよ。命はそれを求めてるんですよ。命は喧嘩したいとか、戦争したいという欲求は命から出てきません。命が唯一、求めるものはできることなくみんなんと仲良く信じあって生きたいという欲求なんです。なんでそういう欲求が命から湧いてくるのかと言ったら、それは命を作ったのは母なる宇宙だ。宇宙の摂理の力によってあらゆるものが誕生した。母なれば、自分の産んだ子供達が喧嘩しないで、殺し合わないで、仲良く信じあって生きていってもらいたいと願うのが母の思いだ。であるがゆえに、命を作ったお母さんの願いであり、思いなんですね。確実に命は、明らかに宇宙の力によって作られました。宇宙は我々にとっては母なる命だ。なんで我々の命からできることならみんなと仲良く信じあって生きていきたいって気持ちが湧いてくるのか、それは人間に命を作ったお母さんがそういう願いを人間に込めたからです。だから我々が本当に宇宙によって作られた命である人間として、母の期待に応える生き方をしようと思ったら、どうしたら一体みんなと仲良く信じあって生きていけるんだろうってことを考え続ける…ここに母の期待に応える人間らしい人間としての生き方の基本がある。そういうところから社会性という、みんなと仲良く生きていくという、そういう言葉、具体的に求められてくるわけであります。

じゃあどうしたら考え方の違う人と価値観の違う人と一緒に仲良くやっていけるのか。その方法論をちゃんと考えてみる必要がある。ただ単に理念的に理想的に考え方の違う人とも仲良くやっていかないといけないっていうことを理想論として語るだけじゃなくって、私が申し上げてる感性の哲学は実践論ですからね、こうしたらできるんだってことをちゃんと申し上げるのは、感性の哲学の価値というか、独特の素晴らしいところであります。

どうしたら価値観が違う、考え方が違う、違う宗教の人と仲良くやっていくことができるのか。その方法論は、考え方の違い、違いっていうのは一体何で出てくるんだってことなんですよね。違いがなくて同じだったら誰も喧嘩してない。違いができてきて、対立して、果ては戦争して殺し合うのか。なんで血が出てくるのかと言ったら、生まれながらに考え方が違うということはない。生まれながらに考え方が違う、ムカついて生まれてくる人間はいません。考え方が違うというのは、後天的に作られてしまうもんなんですよね。どのようにして後天的に考え方の違うは作られていくのか。考え方の違い、価値観の違い、違いが出てくる原因が五つあるんですよね。五つしかないんだ。どういうことなのかと言ったら、体験が違ったら考え方が違ってくる。経験が違ったら考え方が違ってくる。その人が持ってる知識・情報が違ったら考え方が違ってくる。物事の解釈の仕方が違ったら考え方が違ってくる。様々な人生における出会いがまた考え方の違いを作ってくる。

考え方が違う、価値観が違うとなって、対立をし、殺し合ってしまう状況になってしまう…その原因っていうのは何なのかと言ったら、体験の違い、経験の違い、知識・情報の違い、解釈の違い、そして人生の出会いの違い。出会いはどういう事件と出会ったか、どういう事故と出会ったか、どういう犯罪と出会ったか、どういう人と出会ったか、どういう本と出会ったか。様々な人生の出会いが人間の人間性を作り出していくんですね。原因なんですね。体験と経験って英語で言ったら両方ともエクスペリエンスで片がつくんですけど、日本語で言えば体験と経験では次元が違うんですね。体験とは、自分の肉体が外の世界とか関わった事実のことを体験という。経験とは、その体験から自分が何を学びとったか、経験内容なんですよね。同じことを体験しても、その人の能力は人間性の違いによってその体験から学び取るものは、人間によって個性によって皆違ってくる。だから同じことを体験しておっても経験には違いがあるっていうことですね。違った体験を持っておったら考えた方が違ってくるけど、また違った経験を持っておっても考え方が違ってくることになります。考え方が違う、価値観が違う、そういう違いっていうものは、一体何を意味するのか。相手は自分とは違う体験をしてるんだ。相手が自分とは違う経験を持ってるんだ。相手が自分にはない知識・情報を持っているんだ。だから考え方が違ってくるのは当然なんですよね。また相手は自分とは違った物事の解釈の仕方をしてしまってるんだ。そして、相手が自分にはないような様々な人生の出会いを持ってるんだ。だから、自分とは考え方や価値観が違ってくるってなってしまうんですね。

これが対立や喧嘩・戦争が生じる原因であります。どうしたらいいのか。=考え方が違うということは自分にない何かを相手は持ってるって事なんだ。そして同じもの持っておる人と一緒にやっておったら、ほとんどのものが一緒だとすれば、対立はしない。同じものを持ってる人と一緒におったら、気楽で楽しいし、愉快にやっていける。だけども同じものを持ってる人とどれだけ付き合っても成長はしませんよね。今より成長しようと思ったら自分にないものを相手から学びとるっていうことをセントバーナード、自分にないものを持ってる人と絡まないと自分は成長しない。同じものを持ってる人とどれだけ付き合っても楽しいけど成長しないことを考えたら、対立って何なんなんだ。俺が持ってないものを持ってる人が誰なのか教えてくれる現象が対立なんだと、対立を理解しなきゃならない。対立って現象は、自分が人間として成長するために学び取らなければならないものを持っている人間が今俺の目の前におるぞってことを教えてくれる現象が対立なんだと対立を理解する必要がある。対立を体験することなしには、我々は自分にないものを持ってんねんが、誰であるかを知ることができないんだ。こういう新しい対立解釈が理解できるならば、我々は対立っていうものが生じた時にどういう態度をとることができるかと言ったら、対立が生じたときに、あいつは俺にない何かを持ってるんだ。人間とは自分にないものを学ばないと成長できないんだ。いったいあいつは俺にない何をもってるんだろう、それを俺は知りたい。いったい俺は成長するために何を学んだらいいんだろう、俺は知りたい。そういう強烈な認識力を持って自分の敵と対峙するという意識が大事になってきます。

これからの時代を生きようと思ったら、考え方の違いや価値観の違いはなくならないんですよ。当然対立は出てくる。対立をなくすことはできません。しかし、乗り越えることはできるわけだ。対立はなくならないけど、対立をきっかけにして人間は自分にないものを相手から学ぶことができる。そして自分にないものを相手から学んで成長することができる。そのために我々は対立という現象を恐れてはならない。対立ってものを必然的なものとして受け入れて、対立を通してしか我々は本当には成長できないんだ。ということを意識して対立に自ら向かって行って、そして対立を通して自分にないもの相手から学び取るという勇気ある活動をすることなしには、自分を成長させる、あるいは本当に社会の秩序を構築し、それを維持する。平和な世界を作っていく、そういう力を人類は持つことができません。いろんな考え方の人がいる限り、対立はなくなりませんよね。宗教の違いがあれば、宗教の対立はなくなりませんよね。だけど、殺し合いに持っていくんじゃなくって、それを自分が成長するための道筋として考える。対立なしには人間は本当には成長しないんだ。と対立を乗り越えることによって、本当に素晴らしい人間関係を作れる実力が自分のものになるんだ。対立を乗り越える努力をしなければ、どんなにいいことを言ったって、言葉だけで、口だけで言っているだけで実力はない。対立を乗り越えて良い人間関係を作ることはできて、初めてその人は社会を生きる、社会性を持った実力をものにしたという風に言うことができるんだ。そういう本当の社会で生きるって言い切れる実力を持った人間になろうと思ったら、我々は日常至る所から生じる対立というものを恐れずに、それを通して自分を成長させるっていうこの愛ある生き方を獲得しなきゃならない。これからの時代を生きる全ての人間に課せられた最重要課題と言っていい。考え方の違う人ともちゃんと仲良くやっていける力を持たなければ、離婚の激増を止まりようがない。両親が別れて不幸になる子供を救うことができない。戦争なくならないけど、戦争を乗り越えていく力を人類は考え方の違う人も一緒にやっていけるって力を作らないと、戦争を乗り越えることもできない。これは一人一人の人間に課せられた、世界を生きる人間に課せられたこれからの時代における最重要課題ですね。そのために対立というのが生じたならば、どう対処したら良いのかって言ったら、あいつは俺にない何を持ってるんだろう、俺は知りたい。一体俺はあいつから何を学んだら俺は成長できるんだろう、俺は知りたい。という欲求を持つことができるかどうか。そこに対立を乗り越え、社会の秩序を作っていくことができるリーダーになることができるかどうかの決め手がある。

これこそまさに社会が求める、社会性というものの最も大事な原理ですね。自分が幸せになるためにも、我々は考え方の違う人とも一緒に生きていく力ってものを作っていかなければならない。ましてリーダーは、まして経営者は、まさに組織のトップは、色んな人間性、いろんな考え方、価値観の人を全部統合、統率して使いこなしていかなきゃならんのだから。人の上に立つ人間こそ、まさに考え方の違う人と共に生きる本当の愛の力を自分のものにしていく努力をこれから地道に積み重ねていかなきゃならないと思います。こういう考え方が違い、価値観が違い、宗教は違っても一緒に仲良くやっていけるって力をどう言うかって言ったら、矛盾を生きる力という。理性は矛盾を排除しますから理性では考え方の違う人と一緒にやっていけません。愛は理屈を超える力である。愛は考え方が違ってもどうしたら仲良くやっていけるんだろうと考えることによって、愛は存在し、愛は出てくるわけですから。愛こそまさに矛盾を生きる力。これからの人類に最も求められる緊急の課題は、矛盾を排除する、勝ち負けを争う対立じゃなくって、矛盾を乗り越えて矛盾を生きる、愛の力がこれからの人類には求められるってことを意識しながら、是非皆さん方もこの社会を生きてもらいたいとように思います。それは自分の幸せのためなんだ。

友達はちょっといても、長い間付き合ったら、必ずいろんな点で違いがわかってきますよ。またどれだけ好き好き好きで結婚しても、長い間一緒におったら、いろんな点で嫌なところ、許せないところが見えてきますよ。それにとらわれ始めたら人間関係は壊れてしまいます。我慢して生きるんじゃなくって対立っていうのを自分の成長の糧にしていく、そういう積極的な生き方がこれからは必要なんですよ。我慢して生きておったら人生は悲しいし、辛い。我慢して生きるんじゃなくってそれを自分の成長の糧にしていく。自分にないもの持っている人と出会ったことに感謝する。それを喜びとする。そういう人間性がこれからは求められてきます。それが愛だ。社会を生きるためには理屈を超えた愛の力が求められるんだ。是非このことをまず第一の社会の中で生きる原理として理解をしておいてもらいたいと思います。

もうひとつの社会の中で生きる上で大事なことは、自分の価値は他人が決定するって原則が社会において働いているということですね。就職するってことは、自分の力が採用の側から認められたことによって就職はできるわけですよね。社会の中で生きるためには、自分の価値は他人が決定するっていう厳しい現像が働いてることを忘れてはならない。他人から評価されて初めて社会の中で生きる価値が生まれてくる。現実の社会は他人に評価されてなんぼの世界。他人から評価されなかったらどんなにすごい力を持っていても、他人からすごいと言われなかったらゼロだ。これは社会の厳しいところですよね。お前なんかいらんって言われたら、生きていけない。だからこそ社会の中で生きるためには、人の役に立とうとする、人の役に立つ人間になりたいという欲求が基本的に大事なんですよね。人の役に立つことを喜びとする感性というものがなかったら、どんな仕事の成功はできません。人の役に立ちたいという気持ちがあって初めて社会の中では幸せに生きていくことができる。もっと言えば、人に必要とされる人間になりたい、人に必要とされる人間にならないと社会の中では生きていけない、そういう自覚が求められわけですよね。

今の時代においてどういう力が人間に要求されているのか、そのことを知って人が求めるような力を自分で作っていくってことをする必要がある。それは基本的に教育の力ですけどね。自分自身も人から必要とされる能力を持った人間になる努力はしていかなければなりません。ただ自分の持ってる力を誰も認めてくれないって言って嘆いているようでは、能無しというか、時代に生きる力を持つことはできません。

有名な孔子の中国の言葉にも「人の己を知らざるを嘆くなかれ」人が自分のことをわかってくれないと嘆いているようではいけない。人の己を知らざるを嘆くなかれ、その良くする事なきを憂う。という言葉があって、人が認めてくれないって言って不平不満を言っているようではまだ人間としてはちっぽけで浅い。認めるも認めないもない。認めざるを得ないという力を見せつけないと現実の社会においては生き残れないんだっていうことを、もう2000年も前から言ってるわけですよね。2500年か。本当に春秋戦国の古代からそういうこと言われてるわけですよ。人の己を知らざるを嘆くなかれ。人が認めてくれない。とそういうそのちっぽけな嘆きを思っていたらいけない。認めるも認めないもない。力を見せつけないと生きていけないんだと。自分の力を見せつける、それだけの力を養っていくのが本当に時代の中で生き残っていく努力の仕方だと。社会の現実ってのは、人に認めてもらってナンボの世界だ。他人の評価によって現実に生きる自分の価値は決まる。であるがゆえに人の役に立つ人間になること、人に必要とされる人間になることも現実的に求められる課題であります。

まず個性の時代と言われるこれからの社会の中で我々に求められる力は愛だ。愛とは矛盾を生きる力だ。そのことを是非、もう一度社会というものの中で生きる原点として思い起こしてもらいたいし、自覚を新たにしてもらいたいという風に思います。

次は職業と何か。社会に出れば職業を持つ。職業持って初めて社会人。職業を持たない間は社会人じゃないんですよね。どれだけ年取っても職業がなかったら社会人じゃない。社会人はお互い役に立ち会うという関係性が社会ってものですから。何をもって役に立ち会うのかって言った職業というものを持って、お互いに役に立ち会う。それが社会の現実なんですよね。

職業というものを持って初めて社会人という風に言われる。定職につくことができなければ、まだ風来坊と申しましょうか、自分の力で生きていくことができない。社会人とは認められない。職業を持って仕事をしているってことが社会人として生きてるってことの現実には証明になるわけですよね。職業とはなんなのかってことも、またこれも原点に帰ってちゃんとこうを考えてみなければいけない課題であります。

社会の中で職業人として何が一体大切なのかも、何が求められるのかということですね。基本的に職業とは人を幸せにする活動なんですよね。人に喜んでもらう活動は職業であります。だけど、単に人に喜んでもらうだけではボランティアでもいいんだけど、職業とは人に喜んでもらうことによって、金銭を獲得する。そのことによって自分も幸せになる。そういう活動を職業と言います。アマチュアではない、プロである。プロはお金を取るんですよ。ただお金を取るんじゃなくて人に喜んでもらって、そして人の感謝の印としてお金をもらって、そのことで自分も幸せになると。それが職業。職業とは人を幸せにすることによって自分も幸せになれる活動のことを職業と言う。職業とは人を幸せにすることによって自分も幸せになれる活動を職業と言う。これが社会の原則だ。まず自分が幸せになろうと思ったら、社会を成り立たないんですね。まず人を幸せにすることによって、努力によって自分がまた幸せになっていく。それは社会ってものの実践的な姿であります。自分が幸せになろうと思ったら必ず人を犠牲にする。これでは社会の秩序が崩壊します。まず人を幸せにする努力をすることによって、自分の力を成長させて、その成長した力が自分をも幸せにしてくれる…そういう結果に結び付いていくのが職業という活動の本質であります。職業は、みんな人が喜ぶことをしてるんですよ。人の役に立つことをやっているんですよね。自分の役に立つことをしてるんじゃないんだ。全部人のためにやってるわけだ。それは相手の喜びというものの報酬となって返ってきて、自分も人から感謝されて、お金がもらえて生活していける。それで幸せな人生が送れるという、循環ですよね。職業とは人を幸せにすることによって自分も幸せになれる活動。人を幸せにするだけじゃこれはボランティアで職業じゃない。自分も幸せになって初めて職業だ。

本当に人を幸せにするためにはどうしたらいいのか。本当に自分が幸せになるためにはどうしたらいいのか。そこでもう少し職業とは何なのか、深く考えてみる必要があります。感性の哲学では職業をどういう風に言っているかと言うと、職業とは人に喜んでもらえるような仕事の仕方ができる能力と人間性を持った本物の人間を養い、育てるための活動が職業である。とい風に言っています。職業とは人に喜んでもらえるような仕事の仕方ができる能力と、人間性と思った本物の人間に人間を成長させるという活動が職業である。職業の目的は、自分自身を本物の人間に成長させるというところに目的があるってことですね。普通の常識では職業とは何なのかと言ったら、生きていくための金儲け、獲得するための手段なんだ。実際問題、意識を持ってしようとしてる人はほとんどですよね。みんな金が欲しいから就職するんだ。ちょっとでも金をたくさん儲ける、もらうことができる職業に就こうとする。皆、金が目的。お金を目的にして働いたら人間性は醜くなる。卑しくなる。金を目的に働いたら、みんな人間性が卑しくなる。心根が卑しい。金の奴隷だからだ。今ほとんどの人は金の奴隷になっている。自分はそうだと思わなくても、資本主義経済の下で就職して働けば、誰でもお金のために働かされてるっていう状況に引きずり込まれてしまうんですよ。俺は金のために働かないぞと言っていても、会社に勤めて仕事をすれば誰でも会社が利益が上がるようなそういうことを目的にした仕事の仕方をさせられてしまう。金を目的に仕事をしてないと会社を成り立たない。みんな金のために働いてる。皆金の奴隷。それが現実だ。

それが為に現代人は卑しい、醜い人間性というものを忘れてしまったような生き方に堕落してしまっておる。大事なことは、経済は人間の為にあるのであって、人間は経済の犠牲になってはならないってことですよね。だけども資本主義経済の中では、多くの人が、毎年3万人以上の方が金の苦しみによって自ら命を絶つということをやってしまっている。たとえ命を絶たなくても、働いてる人の6割はなんらかのストレスを感じて、精神的な病をみんな持っている。みんな健康そうに見えてるけど、働いている6割は何らかの薬を飲んでる。全然何の薬も飲んでない人、誰もいない。皆健康のためだとか、なんとか言って通販でいろいろ買ったりして。病院で薬もらわなくても、いろんな形でみんな薬を飲んでいる。6割じゃないも全部そう。みんなほとんど病気なんですよね。それが現実だ。だけどよく考えてみれば、経済は人間の為にあるのであって、人間が経済の為にあるんじゃないんだ。だから人間が経済の犠牲になってはいけない。そのことをまずは原点に帰ってちゃんとわからんといかんわけですよね。人間が経済の犠牲になったらいかん。我々は労働し、働くことによって人間性が成長し、ますます幸せを感じる。経済というものが人間の為にあるとは言えない。

じゃあ一体我々はどういう働き方をすれば、人間性が豊かになり、また本当に経済活動をすることで幸せって感じるって言うことになれるのか。そのために大事なことは、職業っていうのは一体何なのか、をちゃんと知ることですね。職業ってものは人に喜んでもらえるような仕事の仕方ができる能力と人間性を持った本物の人間に成長するために人間がする活動なんだ。職業という経済活動をすることによって、自分自身が人に喜んでもらえるような仕事の仕方できる能力と人間性を獲得して、本物になるってことが経済活動のまず第一番目の目標なんだ。自分自身が人に喜んでもらえるような仕事の仕方ができる能力と人間性を持った本物の人間になったら、なったレベルに応じて金はわんさか入ってくるという構造に、経済と人間の関係はなっているということですね。

金を儲けようと思ったら人に喜んでもらえるような仕事の仕方をせんといかんのですよ。そのために実際労働して、どうしたら人に本当に喜んでもらえるのかを知るわけですよね。労働しないで机の上で考えて、こうしたら喜んでくれる、ああしたらいいんじゃないかと考えとってもわからん話。実際問題、実力とは実際問題、実践して人と向き合って、本当にその人に喜んでもらえたという結果を出さないと、本当の実力は身につかないですよね。そのために我々は労働するわけだ。働くわけだ。そして、確か喜んでくれた、感謝してくれたというそ結果を見て、俺のやり方は正しかった。俺のやり方はよかったっていって、自分の仕事の仕方を成長させていくことになるわけですね。それと本当に人の役に立つ人間になるっていうそういう努力をしてるわけですよね。それは経済活動を通して自分自身を本物の人間に成長させるという意味であります。

だけど人に喜んでもらえるような仕事の仕方とは、一体どういうものなのかと言ったら、単に客に喜んでもらったらいいだけの話じゃないんだ。企業における仕事っていうものは、一緒に仕事をしてる仲間がいる。だからお客さんに喜んでもらっただけでは半分50%で、一緒に仕事をしてる仲間にも喜んでもらえ、感謝してもらえるような仕事の仕方ができて、初めて職業人として本物と言うことができるわけであります。客にも仲間にも喜んでもらえるような仕事の仕方ができる能力と、人間性を培っていく。そのことによって社会人として本物と言われる人間に成長することができるわけですね。

会社の中で起こってくる様々な人間関係の問題。「あいつは嫌な奴や」と会社の中で色々対立したり、いがみ合ったり、敵対したり、という問題っていうのは、全部どうしたらこの人と上手く仕事をしていくことができるのか。自分に成長できるのかってことを考えさせてくれるために起こってくる現象であって、社内での人間関係の問題も仕事上の問題も技術的な問題も全部これは自分を成長させるために出てきてる問題なんだという風に考えて、人間関係の問題を通して自分を成長させていく、自分を磨くという心づもりで我々は仕事をする必要があるわけですよね。

いろんな意味で客にもまた仲間にも、両方の意味で人に喜んでもらえるような仕事の仕方ができる能力と人間性を持って、本物人間になる。そのためにはどうしても仕事をしないかん。労働しないかん。働かないかん。それなしには本当の実力はできない。そのこともちゃんと確認して、我々は社会の中で仕事をするってことをやっていかなければならないと思います。

職業っていうのは、実際問題、人から金を取るという仕事ですから、堂々と金を取るためには、仕事をする人=プロであれ。金を取る人=プロって言うんですけど。金を取らない人はアマチュアですよね。堂々と金を取ろうと思ったら相手に「さすがプロですね」と言わせなきゃいけない。「さすがプロですね」と言わせないと快く金を払ってくれるっていう状況にならない。そのために職業人が、仕事の内容として目指さなければならないものは、全ての人に「さすが」と言わせようという、そういう目標を持って、そういう目標を立てて、自分の仕事の腕を磨いていくということですよね。腕だけじゃなくて、人間性も必要ですけど。能力と人間性、両面において「さすがですね」と言ってもらえる、そういう仕事の仕方ができることを目標にしていくことが、職業人として大事だと。「さすが」と言わせて初めてプロだと。「さすが」と言わせて初めて堂々と金が取れる。「さすが」と言わせて初めて相手は快く金を払ってくれる。

実際、仕事の現場に行けば、本当にたくさんの人が「さすが」と言わせるような仕事の仕方をしてらっしゃる方も多々見受けられるんですけど、中には手抜きをしてしまったり、あまりにも仕事に慣れ親しんだばっかりに、いい加減な仕事の仕方をして怠けてしまったりということになってしまうような人も、たまにはいらっしゃって。それがいろんな建築現場から問題が出てくる原因になってるわけですよね。

いっとき非常に大きな問題になった地盤を固めるために、岩盤に届くまでちゃんと杭を打っているか。ちゃんと岩盤に届いてない状態で杭打ちを止めてしまったところがあって、それがためにビルに傾きが出てきたりと、そういうことになって非常に大きな社会問題になりました。

とにかく、「さすが」と言わせて初めてプロ、という仕事の仕方の水準・目標ってものを見失わないように、心してやってもらいたいと。

それから、組織として仕事をするってことは、必ずリーダーとフォロワーという関係性があります。リーダーっていうのは人の上に立つという仕事ですけど、リードという言葉の意味を考えると、リーダとは先頭に立って歩くと言うか、先頭に立って何かをするっていうのがリードという言葉の意味であります。もうひとつのリードっていうことの意味は、下のものを引っ張るって言うか、そういう先頭に立つという意味とそれからついてくるものを率いる、引っ張るという両面がリーダーとしての仕事としてあるわけですね。リーダーは率先、垂範して、見本を示すような働き方をしなきゃならないし、リーダーは常に部下を育てるという教育的な配慮をもって、部下に関わるっていう姿勢がリーダーには求められわけですよね。フォロワーっていうのは、社員のことをフォロワーって言うんですけど、フォローって言うのは、上の者についていく、上の上司のリレーだの足らざるところを補うという意味でのフォローっていう意味もあるわけですよね。だから自分がリーダー・トップに立たない間は、常に上司を責めるんじゃなくて、足らざるところを補って、保管していくというそういう役割があるんだってことを忘れてはならない組織の中でそのリーダーを責めるようではその組織は崩壊します。成長しません。フォロワーは、常に上に立つ者足らざるところを補って保管していく、あるいはリーダーを育てるというの付き合い方をしていかなきゃならないし、または リーダーに従属する、従うという、フォローという重要な役割であります。

会社に入ったら基本的には不平不満を言ってはいけない。上司を批判したらいかんのですね。不平不満を言うようなら、「もう会社辞めてくれ」と言わんといかん。会社に入るってことは、その会社が成長発展するために協力しますっていうのが就職っていう契約の意味なんですよね。就職っていうことは、会社に就職ってことは、その会社の発展成長のために自分の力を出します、協力しますというのが就職の意味だ。会社に入ってから不平不満も言うよでは、もうその会社にいる資格はない。即刻辞めさせられて当然だ。会社に入って不平不満を言うようじゃ、社員じゃない。言うんだったらどうしたら会社が成長・発展するのかの提言・提案をしろというのが、リーダー側からのフォロワーに対する要求であります。

組織論というのがありますけど、組織論から言ったら、組織に入って不平不満を言うようじゃ、その組織は崩壊する。組織に入って言うべきことは、どうしたらその組織が発展・成長するかの提言・提案をすること。これはフォロワーの役割ですね。けじめをちゃんとつけないと会社の結束力・団結力は弱まり、滅びます。その覚悟を持って、就職って言うことは行われなければなりません。

社会の中で、職業をもって仕事をする上では、心得ておかなければならない原則なんですよね。もう一つ職業において、重要な理解の仕方があるんですけど、何で人類は職業というものを持って生きるという社会を作ったのか。人間っていうのは、みんなこれまで38億年間ずっと生き続けてきて人間になったんですよね。だから全ての人の命の内面には、38億年間の自分の命の祖先たちの生き様というものが、遺伝子としても積み重ねられてきおる。遺伝子の中に積み重ねられてきた自分の命の祖先たちの生き様というものを仏教的な言葉で、宿業というんですよね。遺伝子とは、過去の色んな活動の積み重ねとして、作られてきたわけです。遺伝子の中には自分の命の祖先たちの様々な活動記録が全部残っていて、遺伝子が働いて今の自分の人生ってものが形作られていくわけですね。そういう意味では、自分の今日、現実の人生っていうのは過去から積み重ねてきた遺伝子というものが自分の人生の大半を支配していると言っても過言ではありません。遺伝子に組み込まれた情報、遺伝子に組み込まれた様々なものが、顕現してきて、いろんな活動ができ、能力も湧いてきますよね。いろんな生き様が出てくる。遺伝的に自分の命が湧いてくるものがたくさんあるわけですよね。宿業と言うのであって。宿業には善業と悪業があって、過去に犯した罪のことを悪業言い、良い行為を善業と言います。善業が出てくれば自分の人生は良くなっていくし、悪業が出てくればなんでこんな不幸なことになるんやと、そういうわけのわからん不幸や事件や事故に巻き込まれてしまうんですよね。避けがたい人生の原理的な姿であります。

では一番怖いのは、自分の命の中に積み重ねられてきた様々な罪ってものが、自分の現実の人生において出てくる。それは過去の人が犯した罪っていうのは自分の遺伝子の中にあれば、罪の償いをさせられるという、そういう人生になっていくわけであります。悪業っていうのはその影響を受けて自分の人生悪くなるというだけじゃなく、悪業というものを自分が償うようなことをすれば、その悪業は消えて罪業消滅という風に言われますけど、業が消えて、人生は過去に支配されないで、今の自分の生き方が良ければ人生は良い方向に進んでいくという…そういう形になっていきます。

また自分の命の中に善業の人が、過去の人が犯した良い行いがあれば、そんなに努力してないのになんか幸せだなぁという人生になってしまうこともあるわけですよね。これが業というものの影響なんですね。世間で言われる言葉には、親の因果が子に報いと言うね、お父さんお母さんおじいちゃんおばあちゃんが立派な人で周りの人に色々いいことをしておると、その孫達がそのおかげで皆から親切にされて、そして良い人生が歩めるし、また良い人と結婚できたり、良いことがどんどん増えてくだけど、お父さんお母さんおじいちゃんおばあちゃんが周りに迷惑をかけるようなことしてると、あいつの孫かと言われて、皆に嫌われて嫌なことをされたりする。親の因果が子に報いという働きであります。そういうものがあるんですね。

命にある悪業、悪い方を持ち続けておったら、自分の人生は不幸な方向に導かれてしまう。どうすれば後めたいものを乗り越えて自分の人生を自分の力で良い方向に動かしていくことができるのか。そのために何をするかって言ったら職業なんですよ。職業とは人のために尽くす、人に喜んでもらうこと、人を幸せにする。そのことによって自分の中にあると言われる悪業が消滅して、そして自分が幸せになっていくだけじゃなくて、自分の祖先たちの命も償ってあげることで罪は償われて、仏教的に言えば、成仏できる。自分の命の過去を変えることができると、そういうことになるわけですね。キリスト教では職業を証明っていう言葉があります。辞書で引いてみてもらいたいんですけど。証明、命の中にある罪を償うために職業はあるんだと。そういう理解がいろんな宗教の中にあります。何で我々は人のために尽くす、人を幸せにする職業ってものをしなきゃならなかったのか。それは命の中に業というものがあって、自分の人生を悪くしていく…何も悪いことしてないのになんで悪い事が起きるのか…交通事故や犯罪に巻き込まれる…それらが現実の人生には多々あるわけであります。どんな人も自分の命の祖先たちが犯した38億年間に渡る祖先の活動が全部自分の命に積み重ねられてきてますからね。それが出てきて、我々の人生は展開されるんですからね。過去の影響を受けるだけじゃなくって、今の自分の生き様が過去の色んなものを消し去る、消去して償って、今の自分の生き方が祖先をも救い、また自分の人生も立派にしていくと。そういう生き方に結びついていく。そういうことのために職業という、人のために尽くすという行為が全ての人間に課せられてる。どんな人にも善業、悪業があるんですよ。業という遺伝子があるんです。遺伝子によって人間の様々な人生は、50%以上支配されてるわけだ。あるものが出てきて、今の我々の生き様ってものが、命から出てくる過去の色んな積み重ねと対応して、今の命の中に過去の遺伝子があるわけですから、人のために尽くすしかないんですよ。ボランティアをするとか仕事をして人に喜んでもらうとか。自分の命に中にある悪い遺伝子が償われて、プラスマイナスゼロになって、さらに人に尽くしたら自分も幸せになっていく。自分がそういうことをすれば自分の子供や孫があの立派なお父さん・お母さんですかと言われて、親切にされるということですね。子孫にも良い影響を与えられる。そういうことが職業というものを人類が持つようになった原因なんですね。そういうことも職業とは何かっていうことを考え、社会の中で我々は仕事をしていく上で考えておかなきゃならない重要な原理であります。

あんまりこういう命の秘密っていうのは、多角的に解き明かされていない面があって、なんか宗教かそういうことになってきてしまう恐れもないわけじゃないですけど、現実に我々の中には38億年間積み重ねられてきた遺伝子がある…この事実は誰も否定できない。その遺伝子の力が出てきて、そして我々はだんだん肉体も大きくなっていって、能力が備わって、人間として生きていけるという状態、成長するわけですけど。成長だけじゃなくって、自分の人生を悪い方向に歪めるようなことも、働きも命はあるわけであります。悪い因子が出てくれば、結果として今の自分の人生は悪くなるという…そういう状態になることは科学的に考えても否めない事実だ。そういうものと職業は関係してるって事ですよね。職業とはなんなのか、をちょっと考えれば自分の中にある罪を償うために我々は職業というものを持っているという。そういう活動をさせられてるんだと。職業に対する理解の仕方もあればいいかな。

一応休憩の時間に入りましたので前半の話はこれで終わりにします。どうもありがとうございました。

それでは後半の話に入りたいと思います。

今度は第3番目の人間とは何かっていうことですね。社会の中で人間として、人間らしい生き方、活動していくためにはどういう意識が大事なのかということなんですけど。まず第一番目に人間は誰でも長所半分・短所半分と、そういう構造で人間性を持っておるんだってことですね。どんな人と接する場合でも忘れたらいかんということなんですよね。いろんな人がおりますけど、だけどみんな長所半分・短所半分という良いところも半分、悪いところも半分。そういう人間性っていうもんだということをちゃんとわかって、上司にも部下にも対するというそういう気持ちをまずは社会の中で多くの人と関わる場合にちゃんと自分の心に納めていかなきゃなきゃならない大事な原理だってことなんですよね。

人間には長所短所があるということは誰でも知ってるんですけど、何で長所も半分、短所も半分という理解の仕方をしなきゃならんのかってことなんですけどね。これは人間っていうのは大宇宙の中にある一個の存在であって、宇宙は我々の外にあるんじゃなくて、我々自身が現実に存在する大宇宙の一部分を占めてるんだ、我々も宇宙だという認識をまず持つことができれば、宇宙とは何なのか、宇宙とはプラスのエネルギーとマイナスのエネルギーが半分ずつあって、プラスとマイナスのエネルギーが協力しながら宇宙の秩序を作っている…それを宇宙の摂理というわけであります。宇宙の中に存在するすべてのものは、宇宙の摂理、この原理に基づいてみんな作られているわけですね。なぜ宇宙の中にある星はだんだん丸くなるという動きをしておるのかっていうこと考えてみると、三次元という空間の中でバランスのとれた状態ってものを作っていくと、全部球体、まんまるになっていく。中心点から等距離にあるというのが球体って言うんですけど、バランスをとるという働きであらゆるものはつくられてるもんですから、星もだんだん丸くなると、そういう傾向性があります。また動物も植物もみんなだいたいどっか丸い。丸い頭、丸い腕も脚も丸い。幹も丸い、根っこも丸い。丸いというものが基本的にどんなものにもあるんですね。宇宙の摂理、バランスをとる働きというものが、あらゆるものを作る証明なんですよね。ですから、バランスを取ろうと思ったら、相対立する権原理があって、原理が協力し合わないとバランスを取るって働きが出てきません。宇宙はプラスとマイナスがバランスをとるということをしてて、宇宙の秩序が作られてるわけですよね。だからそういう構造を対存在の原理と申しまして、あらゆるものは一対という対という構造を持って宇宙の中に存在していると考えられるわけであります。プラスにはマイナスがある。陰には陽がある。光には影がある。善には悪、○○には●●、しにはぎ、清らかには濁り。男には女。動物には植物。宇宙にはみんな相対立するのは、協力しあってバランスをとるという働きでみんな存在してるわけですよね。動物・植物っていうのは、お互いにあり方が違いますけど、植物は炭酸ガスを吸って酸素を吐く。動物は酸素を吸って炭酸ガス吐く。そういうことでお互いに対立しないで協力しあって、共に存在してる。これが宇宙の構造基本原理なんですね。宇宙が作るもの全て対という構造で成り立っており、だから人間には長所・短所があること長所も半分と短所も半分あるんだという風に考えないと、宇宙の摂理によって作られた人間という命というものを理解することができない。長所も短所も存在するものであって、なくなることはない。長所も短所もなくならない。どんな人でもいいところが半分あるけど、悪いところも半分ある。これは人間っていうものが避けることのできない宿命的なあり方であります。人間にする場合、どんな人でも長所も半分あるんだけど、いいところあるんだけどダメなところも半分。それでいいん。そうじゃなかったら宇宙が作った存在としてのあり方になってない。短所は必ず半分あってなくならないんだ。短所がなくなったら人間じゃないんだ。そういう意識を持って人には接するべきだ。子どもにも夫婦にも友人にもみんなとにかく短所が半分あって人間なんだ。半分なかったら人間じゃないんだ。短所は半分もあっていいんだっていうそういう人間観を持たないと、社会の中でいろんな人と関わって、そしてお互いに良い人間関係を作っていくという実力を養うことはできません。

すごい人だなと思っても、世間では立派だと言われてる人でも、奥さんに聞いてみたら、あんな人になってしまって、どこがそんなに良いの？となってしまっている。長く一緒に居ると、必ず自分から見て半分出てきてしまうんですよね。ちょっと付き合った時にはすごいなと思っても、長く付き合ったら必ず自分から見て嫌やなぁと思う、そういう嫌なところ欠点・短所・軽蔑したくなるところが半分出てきてしまうんですよ。これも宿命だ。それをちゃんと覚悟してないと、人間関係は長続きしません。

だけどついつい短所ばかりを気にしてしまったりするんですけど、どんな人にでも良いところ長所も半分あるんですよね。どんな人と会う時にでも、この人は俺よりすごいところを半分は持っていらっしゃるんだと言うね、そういう目で人を見なきゃいけない。ダメなところも半分あるんだけど、それはなければならないものであって、あって良い。短所がなければ人間でない。そういう意識を持って人間には接しないといけない。短所はなくなりませんから、間違っても短所をなくす努力をさせてさせてはならない。また自分自身も短所をなくす努力をしたらいかん。努力をしたら人でなしになっちゃうんですから。短所が半分ないと人間じゃないんですから。じゃあ半分も短所があっていいのか、気楽になって開き直ってしまっては問題なので、長所も半分あるんですよね。短所はなくならないから短所をなくすような馬鹿な努力はしたらいかん。伸びる長所をとことん伸ばす努力を人間はセントバーナード。伸びる長所をとことん伸ばす。長所を伸ばして長所が他人から一目置かれるようになると、そうすると、何の努力をせんでも、ほったらかしても短所は人間の味に変わる。味に変わってくると人間味と言われる魅力に変わってくる。長所は伸ばさなければ短所は永久に単なるだめな短所なんですけど、長所を伸ばすと、短所は人間味と言われる魅力に変わってくる。あんなすごい力持ってるやつなのに、こんなところがあって面白いよね、なんか人間味を感じるよね、なんか親しみを感じるよねっていう風に変わってくる。長所を伸ばさなかったら短所は永久に人に嫌われる。長所を伸ばしたら、短所は人間味という味に変わってきてかえって魅力になってくる。

長所を伸ばして短所が人間の味に変わってくるって言うこういう状態を何と言うか、これを角熟。これまでは円熟を目指して、まんまるになって、欠けているところがないまんまるを目指していた。完璧にならないと思ってやってきたけど、それでは人間皆短所があって、失敗もし、罪を犯し…というのが人間。まんまるになんかなれない。人間みんな個性があって、あちこちデコボコがある。そういうへこんだり、角張ったりするところがあっての個性だから。その個性のあるままで成長していく姿を角熟という。角ばったまんま、そのまんま東で成長していく。角ばったまんま、さんまのまんまで成長していく。円熟目指せば永久に完成はない。角熟を目指せば個性のある人間として完成される。まだ角熟という言葉は辞書に載ってない言葉ですけど、円熟があるんだったらば角塾があって当然。将来必ず書くことになると思うんですよ。丸くはなるな。とんがって生きろ。とんがって生きるということは、個性を磨いて、その個性が人の役に立つようになった状態を角熟というんですよ。角ばっていて、それが人に嫌がられてるようじゃ、まだ長所の磨き方が足らない。長所が他人から一目置かれる存在になってくると短所は人間の味に変わる。魅力に変わってくる。これを角熟。丸くはなるな、とんがって生きろ。個性のある存在として、生きろよということです。個性がある存在というのは、長所を磨いて、短所が人間の味に変わる。それを角熟と言う。とにかく人間は誰でも長所は半分。どんなに落ちぶれた人でも可能性としては、この人には俺よりすごいものが半分あるんやと。そういうことで相手を見下すような、軽蔑するようなそういう目で見てはならない。可能性としてはどんな人でも俺よりすごいところ半分持ってらっしゃる。そういう目をしてはならない。短所がなければならないんですけど、短所があるだけでは人間じゃない。短所があるだけでは動物だ。人間になるためには俺の長所・短所はここだ、ってわかって初めて人間になることができる。短所の自覚がなかったら人間になれない。

人間の本質は理性ではなく心だ。感性だ。人間らしい心とは謙虚な心だ。謙虚な心を作ってくれるのは、長所ではない、短所だ。短所がなくなってしまったら人間を謙虚にする根拠・理由がなくなってしまう。だから人間らしい心を作る原理は長所じゃなくて短所だ。短所がなくなったら謙虚な心は作れない。そういう意味で短所をなくす必要はないし、短所をなくす努力はしたらいかん。そんな時間があったらとことん長所を伸ばすことに全勢力を注ぎ込まなければならない。何か一つでいいからあいつをこの点においては、すごいやつやって言われる人間に早くなること。これが人生を楽しく、愉快に生きていくための最も近道ですよね。何か一つでいいから、このことに関してはすごいやつや、とそう言ってもらえる何かを自分の中に早く作ること。一点集中ですね。何に特化するか、あれもこれもやったらなかなか伸びない。あれもこれもやっとったらなかなか出てこない。何かひとつに焦点を絞って、これだけはすごいやつやって言われる自分を早く作ることですね。これは人生を楽しく生きるための基本原理だ。

こういうものに特化するか、何に特化するか。何か一つのことに自分の全勢力を吸い込むという、そのことによって他人から一目置かれる自分が作れるって事ですよね。短所があっても自覚がなかったら人間ではない。だから人に注意する場合でも、君の短所はここや、その短所が出てきたら君は嫌われるし、損をするから、そのためにできるだけ短所が出てこないように注意をしようねって言ってあげる。その短所をなくす努力をしろとは絶対言ってはいけない。出てきたら君は嫌われるからその短所があまり出てこないように気をつけようねとは言ってあげる必要がある。また短所が出てきたらすぐに謝るっていうことをセントバーナードね。またやっちゃったごめんごめんとすぐに謝る。人の短所を発見したら責めてはいけない。人の短所を発見して責める人間には血の通った温かな心は微塵もない。短所を責めるということは、人間に完全性を求めているということ。間違った対応だ。人の短所を発見したら助けてあげたい、役に立ってあげようという気持ちがあって、初めて血の通った温かなところがある人だと言えるんですよね。うっかり人の短所を責めてしまった時に反省することとして覚えておかなきゃいけない大事なことですよね。世の中には自分のことは棚に上げて、人の短所を責める人間が沢山居る。人の短所を責めることを持って、正義と考えてるようなそういう醜い人間性を持った人が非常に多い。国会の中でも野党の議員が大臣を責め立てる場合でも、いかにも自分は正義の味方みたいな感じで人を責めて、困ってるのを見てほくそ笑んでる…そういう醜い人間性になってはいけない。人を責める場合にもそれなりの配慮というか、相手の立場を考えた言葉遣い、色んなそういう配慮をする必要がある。人の短所を責める時には良いところも半分必ずあるんだから、まずは立派なところを褒めて、だけどこの点はやはりちょっと問題があって考えてみてもらいかんですよと、人を責めるときは、まずは良いところ褒めてから。その問題点を指摘するみたいな、そういう順序ってものがある程度考えられておかないといけないと思います。大臣を責める場合でも、立派なことをいろいろやられてらっしゃることは、よく存じ上げておりますけども、ここはちょっと問題かなという風に思っております…そんな風に、責める場合でもまず褒めてから注意するとか、そのような心遣いが大事であって、それがあると責め立てても醜いというそういう状態じゃない。だけども、相手の良いところは全然言わないで、ただただもせめてせめてせめまくってて、もう相手が逃げ道をなくして、ぎゃふんと言うまで責め立てるという、これじゃあちょっと心無い。そういうことで、テレビ中継を見た国民が政治嫌いになってしまう。そんなことがよくあります。とにかく、問題点を指摘する場合にもそれなりの順序あるいは配慮ってものが必要だってことも考えてみてもらいたいと思います。

短所の取り扱い方として一番大事なこと、短所はなくならないんですよね。だから短所を隠すのでもない、短所を出てこないように注意するのでもない。1番の短所の活かし方として大事なのは、自分の短所をわざとさらけ出して、俺は、国語は苦手なんや。きみが代わりにやってくれへんかって、人に自分の不得手なところを人にやってもらって、君はすごいね、すごいほんと素晴らしいね、君を雇ってよかったよ、とそういう風にして、その人の良いところを伸ばしてあげるっていう、そういうことも人間の短所に対する対応の仕方として考えなければならない。昔から「実るほど頭を垂れる稲穂かな」という言葉があります。社会的に地位が上がれば上がるほど、威張らないで、ますます謙虚になって対応していかねばならない。ついつい社会的地位が高くなると、地位や立場を重ねたパワハラが起こりやすい。上司になると部下が便りなく見えて、注意をしたりするとますます部下が働いてくれない。上司から見て部下が頼りなく見えるのは当然なんです。当たり前なんです。そこをどのようにして、部下を育てるかってことを考えなきゃならない。方法として一番大事なことは、それなりに努力して頑張って、それなりの地位を得たわけですから、ある程度人より優れている面を持っているはず。そういう人が部下にどのように対応したら良いのか。部下が頼りなく見えても、部下の能力を色々査定して、考えて、上司は自分の短所・欠点をさらけ出して、部下にきみが代わりにやってくれないかと言って、部下に仕事をさせる。そしてその仕事をした部下をきみはすごいねと、相手を褒め称える。そうするとその部下は上司のために働いてくれると、そういうことになってくる。

上司というのは、部下を抱えたら、全部の部下に何らかの仕事をしてもらわなきゃならない。そのための方法として、上司は出来る限り自分の短所・欠点・不得手なところをさらけ出す勇気を持った努力をして、そしてできるだけ部下に仕事をしてもらって自分は楽をする。考えないといけない。仕事は部下にしてもらう。自分は管理職として、また違ったことがいっぱいいっぱいありますので、仕事は部下にしてもらい、その部下に仕事してもらうために自分の短所・欠点・不得手をさらけ出して、やってくれへんかと頼んでやってもらう。そして相手を褒め称える。そのように部下の力を引き出してあげて、成長させてあげる。能力をちゃんと見抜いて、能力のありそうな人に仕事を与える。そしてやってくれたら、それを褒め称えて、感謝し尊敬してあげる。

ついつい上司は短所・欠点をさらけ出すと、部下から舐められるんじゃないかと、部下からバカにされないかと思ってしまうかもしれませんけど。だけども、上司と部下の関係というのは組織にちゃんとある場合には、上司はかえって自分の短所・欠点をさらけ出すことによって、部下に仕事をしてもらうってことが、部下から見たら立派な上司だと、そういう評価に変わってくるんですね。そうして上司は部下を育てるという、そういう接し方をしていかなきゃならない。それが短所の活かし方。このような短所の仕方を活人力という。生活の活と、人と力、活人力と言って人の存在を輝かせる。そういうやり方をして、自分の短所をさらけ出して、部下に仕事をしてもらうという…こういう部下に対する対応の仕方、社員教育の仕方っていうものを覚えていかないと組織というものが活力を持って、部下が上司のために働くという関係性ができてきません。

是非短所をさらけ出して、部下に仕事をさせるというリーダーの在り方ってものを考えて実践してもらいたいという風に思います。そして、基本はとにかく長所を伸ばせば、短所は人間の味に変わる。長所を伸ばせなかったら短所は永久に他人から非難される短所なんだけど、長所を伸ばすことによって短所は人間の味に変わって魅力になるんだ。ということを是非考えて実践してもらいたいという風に思っております。これは角熟の世界ですね。円熟ではない、角熟を目指すことが大事である。丸くはなるな、とんがって生きろ。

人間とは何かってこと考える場合の二つ目の大事なことは、人間の本質は理性じゃなく心だ。皆心が欲しいんだ。理屈はおうたくさんだ。心が欲しいってね。現実社会の中で生きる多くの人の叫びであります。理屈はもういいと言う。本当に求めているのは、心だ。ようやくそういう欲求が命から湧いてくる時代になったんですね。心が欲しい。心が欲しいという叫びをみんな持っているんだけど、実際に現実にあげているのは、まだまだ理屈なんですよ。夫婦も理屈、親子も理屈、学校に行っても理屈、職場に言っても理屈。なかなか心をあげるって言うことはしていない。あげているのはほとんど理屈。だから心が欲しいと思っているのに、理屈で理性的に注意されたり、怒られたりとなると、気持ちがすれ違ってしまって、人間関係がうまくいかないという状態になっておる夫婦関係がある、親子関係がある、職場関係がある。心が欲しいって思ってんのに、理屈で色々説明される。全然自分の心なんて、考えてくれてない。というそういう状態が多々ある。確実に人間の本質は理性じゃない心だっていう時代になってきました。だからこれからは心が欲しいという叫びに応じて、心をあげるということを覚えていかなければならない。心が欲しいという叫びに応じて心をあげないと、心の通い合い、心が通じ合う、心の絆というものはできません。

これまでの企業っていうのは、理性的に作られた組織ですので、これまでの企業は、仕事のつながりと役職のつながりを合理的に作られた仕事のつながり、横のつながりだけで企業が動いていた。合理的、能率本位の合理的なだけどそういう合理的に作られた仕事のつながりで役職の繋がりの中で人間が働くことによって、ほとんどの人がストレスを感じて、働くことが辛い・苦しいという状態にみんな陥ってしまっている。どうしたら理性的な、能率本位の合理的な組織のあり方から脱却して、組織そのものをどうすれば人間的な人間味のあるものに、人間味のある人間的なものにしていくことができるか。組織と言ってもやっぱり内容は人間の関係が作ってるものが組織ですから。組織とその本質は人間だから、人間の本質は理性であるところから、心だったっていう時代に変わったんだから、これからは組織というものも会社の土台に添えなければならない原理は、心のつながり心のつながりだ。心のつながりを企業の土台にすると、その上に仕事のつながりを乗せて、その上に役職の繋がりを乗せるという三次元構造でこれからの企業は経営・運営していかないと、企業を人間的なもの人間味のあるもの人間性がある企業は作れないですね。企業の人間化、企業に人間味を持たせるためには、企業の土台に心の繋がりを作るっていうことを詰めていかなければならない。心の繋がりを土台にして、その上に仕事のつながり、その上に役職のつながりを乗せる…そんな三次元構造でこれからは企業は、形容されていかなければならないことになるという風に思われます。

どうすれば企業の土台に全社員の心の繋がりを作ることができるのかっていう方法論を考えなければならない。そのためには、皆心が欲しいと思ってるんだから、心をあげると言う活動をしないと、心の通い合い、結びつき、心の繋がりができません。それで考えると心を欲しいとは何が欲しいんだ、心を欲しいとは何が欲しいのってことをちゃんと知ることですね。これが噛み合って初めて、心のつながりが生まれてきます。組織の中に心のつながりができれば、心の繋がりは理屈を超えたものですから、心の繋がりが組織の土台に構築されれば、会社というのは理屈では壊れない、強固な団結力というものが会社に生まれてきます。心の繋がりがないと会社は理屈で対立して、理屈で派閥ができて、組織を崩壊させるんですね。理屈を超えた心の繋がりっていうのは、会社の土台に添えられることによって、会社というのは理屈では壊れない理屈を超えた団結力というものが、生まれてきて、そして考え方が違っても、価値観が違っても、一緒にやっていけるという豊かな人間性は、会社のように作られてきて、人間味のある会社が生まれてくるようになります。

心が欲しいとは何が欲しいのかと言ったら、具体的には心が欲しいという叫びには、7つあって、

まず認めてもらいたい。

わかってもらいたい。

褒めてもらいたい。

好きになってもらいたい。

信じてもらいたい。

許してもらいたい。

それで最後には、急がさずに待ってもらいたい。

これが合理的な組織から脱却していくために人間が求めている心の内容であります。

だから心をあげると何をあげることなのかって言ったら、まずは認めてあげる努力をすること。わかってあげる努力をすること。それから褒めてあげる努力をすること。そして好きになってあげる努力をすること。信じてあげる努力をすること。許してあげる努力をすること。そして待ってあげる努力をすること。

この7つが、心をあげるという作業であります。これが噛み合うことによって、確実に心の通い合い、心のつながり、心の絆ってものが構築されていくことになる。何で心をあげるっていうことが努力という言葉を多用することになるのかと言ったら、愛の実践的な原理は努力なんですね。相手のために努力をする気持ちがなくなったら愛はないんだ。相手をために努力する気持ちがちょっとでもある限り、その人間関係にはまだ愛がある。愛がなくなったら相手のために努力することができなくなる。努力する気持ちがなくなってしまう。相手が自分のことをどの程度愛してるかと知ろうと思ったら、相手が自分のためにどの程度までの自己犠牲的努力を払ってくれるかってことを見たら、相手が自分のこと好きなのか分かる。また自分が相手のことをどの程度愛しているか知ろうとしたら、自分が相手のためならどの程度までの自己犠牲的泥浴を払えるかを見れば自分がその人が好きなのかがわかる。努力なしには愛は通じない。努力なしには愛を証明できない。努力の姿勢を見せるって事が、相手に伝える大事な実践的権利なんですよね。

なんの努力もしないで愛してる、愛してるって言うだけじゃ、相手には全然愛の実感が伝わらない。相手の目の前で頑張ってその人のために努力してるっていう姿を見せることによって、確かにこの人は自分のことを思ってくれるし、愛してくれてるって事が分かるわけですよね。そういう行動を求めてるんだ。認めてあげる努力をすること、認めてあげようと努力してる姿を見せること、わかってあげようとしてる努力を見せること、その人を好きになろうとしてるって努力の姿を見せること、褒めてあげようとしてるって言う努力の気持ちを行動に出して見せること、信じてあげようと努力してるっていうことをわからせること、そして許してあげようと努力してるっていう姿を見せること、そして待ってあげるっていう努力の姿を見せること。

それが愛を伝えるって事なんですよね。そのことによって心のつながり、通い合いが具体的に組織に生まれてきます。これからの企業は、企業の土台に人間同士の心が欲しいという気持ちと心をあげるという行動で、がっちりと組み合わせて、そして全社員がそういう気持ちで皆と接するとい、そういう活動をやっていかなければなりません。

あまりこれまでやってなかったことだから、ある意味で難しい努力を積み重ねていかないと、そういう状態がなかなか構築されないと思いますけども。本当に企業を人間化しようと思ったら、本当に企業に人間的な温もりを持たせると思ったら、これをやるっきゃないんですよ。心が欲しいという叫びに応じて、心をあげるっていう活動を全社員がお互いにやりはじめたら、たちまちにして会社っていうのは理屈を超えた団結力で結びつく強固なまとまりが生まれてきます。

仕事のつながりと役職のつながりだけで合理的に動いてる間は、必ずそこにいろんなやり方における対立・矛盾が生まれてきて、会社の活力は低下します。理屈を超えた力がないと、本当にその企業は有機的な団結力というものを持つことはできません。

もう一つ人間とは何かで大事なものは、人間っていうのは人間性という格というものを持つことが、社会の中で人間が生きる基本的な課題であります。人間の格を持って生きるって事どういうことなのかっていうことをちゃんと分かってないといけない。人格とはなんなのか？どういう風にして人間の格のある活動、人間の格にある仕事の仕方というのが出てくるのか。

人間がまず、人格を持つ第一原理とは、不完全性の自覚。俺は不完全だっていうことを本当にちゃんと分かってるか、知っておるかってことなんですね。本当に不完全ってことをわかったならば、人間は自分にも優しくなれるし、他人にも優しくなれる。むやみに人を責めるっていう、そういう行為は取れなくなってしまう。人間は不完全だ。不完全性の自覚っていうものが、人間が格を持つために大事であって、なぜかというと不完全性の自覚、俺は不完全で完璧じゃない、絶対じゃない、不完全だってこの自覚は、人間にしか持てない自覚であって、神にも動物にも持てない。神様が自覚を持つならば完全性の自覚でなければならない。神様がうっかり間違っちゃったりなんかしちゃったら、神様は人間が持ってるような自覚を俺が持てないはずはないと考えてしまっちゃったりなんかしちゃったら、神様は不完全性の自覚なんて持ってしまったら、神でなしになってしまう。神様が持つなら完全性の自覚です。動物は人間と同じように不完全な存在なんですけど、動物は自分は不完全だろうと知らない。なぜならば動物は完全なるものをイメージできない。完全なるものをイメージする理性がない。だから自分を完全でないっていい意識は動物には生まれてこない。人間だけが不完全でありながらも完全なものを意識する理性という能力を持ってるから、自分はそんな完全なもんじゃないっていう不完全性の自覚が人間に生まれてくる。不完全性の自覚こそ人間であることの印だ。だけども、不完全性の自覚を持っているだけでは、それは知識に過ぎない。本当に人格になるためには、不完全性の自覚が命に染み込んで、肉化して体得されて、命から謙虚さが湧き出てきて初めて、その人間性は身についた人格となったって言えるんです。ですから、人格というものができてくるには、不完全性の自覚から滲み出る謙虚さってものがあって、初めて本物の人間と言うことはできるわけであります。

人間とって一番恐ろしいのは傲慢さ。傲慢さほど人間として魅力にもならない。傲慢さほど恐ろしいものはない。せっかく努力をして地位を得た人間が失脚するのは、全部傲慢さゆえに対立をつくり、傲慢さゆえに内部告発を受けて、そして地位から引きずり降ろされる。傲慢な物言い、傲慢な目つき、傲慢な態度…これらは人間であることを根底から失格するようなそういう行為であります。我々は決して傲慢であってはならない。そのことを自分に常に言い聞かせていなければならない。決してどんな人に対しても傲慢な目つきで人を見るという醜い人間性をもってはならない。

その基本原理として、不完全性の自覚から滲み出る謙虚さ、謙虚さが滲み出てきてこそ本物と言うことができる。謙虚にしなくちゃ謙虚にしなくっちゃと思ってる間は、身についてない。謙虚にしなくちゃと思ってる人は、相手がお客さんだと謙虚にと思うのですが、お客じゃないとわかったらいっぺんに変身ってなってしまう。いっぺんに傲慢になってしまう。これではまだ謙虚さは身についてない。湧き出てきてこそ本物。飾りじゃないのよ涙は、と申しましょうかね。中森明菜と申しましょうか。滲み出てきてこそ、本物。意識的に謙虚にしなくてはでは、まだ謙虚さを金儲けの飾りにしている…ということであります。これがとにかく人格、格を作る第一原理。不完全性の自覚から滲み出る謙虚さ。

第二番目は、不完全であるってことは完全なものを意識していて初めて不完全って言葉は出てきますので、人間は不完全でありながらも完全・完璧・絶対を目指すという生き方をしなければならない。だけど絶対に完全にはならない、完璧にならない。だけど完全を目指すという生き方をするのが人間。だけど絶対完全にならないってことを知っていなきゃならない。こういう不完全でありながらも、完全を目指す。だけど絶対完全にならないという、こういう状況を言葉で言うかというと。より以上を目指して生きるという生き方が人間だ。ということですね。いろんな面でもっともっと成長したいという成長意欲をもって生きることが本物の人間の印であって、成長意欲がなくなってしまったらもうそれは人間として偽物という、そういうことになってしまいます。人間は不完全でありながらも完全さを意識するがゆえに常に死ぬまで、何らかの点でもっと良くなりたい。もっと成長したいという気持ちを死ぬまで持ち続けて、初めて人間としての本物の生き方をしてるという風に言うことができるわけですね。

不完全でありながらも完全なるものを目指すという、そういうところから人間的な成長意欲としての欲求が湧いてくる。なんで人間が欲求というものを持って生きることになるのか。それは人間が不完全でありながらも完璧になろう、そこを目指すという、そういう構造を人間性において持っておるから、だからもっと良くなりたい。もっともっとという気持ちが人間の生き方として出てくるってことなんですよね。人間として格を持った生き方をしようと思ったら、成長意欲をなくしてはならない。成長意欲をなくすと、必ず傲慢さが出てくる。慢心が出てくる。成長意欲をなくすと、生き方が霞んでくると言うか、成長意欲を無くすと、もうどうでもいいじゃんって言うね諦めの境地に入ってしまったりするんですよね。行動力がなくなってしまう、活力がなくなってしまう。成長意欲を持ち続けることによって、命は燃え続ける。欲求を湧いてくることによって命が燃え続ける。燃えて生きるためにはどうしても命から湧いてくるものが必要になる。命が湧いてくるものを作る基本原理が不完全でありながらも完璧なるものを目指す、というより以上目指して生きるという精神が、命が燃えるという、湧いてくるものがある、という人間の印であります。燃えるためには湧いてくるものが必要。湧いてくるものはどういう風にして湧いてくるのか、不完全でありながらも完璧を目指す。そこから湧いてくるものができるんですね。より以上を目指して生きるって事が湧いてきた命が燃えるという状態になれるわけで、欲求がなくなってしまったら燃えません。何していいかわからなくなっちゃう、欲求がなくなったら、欲求のない人間は自分のない人間だ。欲求のない人間は自分の人生を作れない人間だ。欲求がなければ他人に言われたことをさせられてしまうしかない。奴隷だ、家畜だ。生きるためには命から湧いてくるものが必要だ。命から湧いてくるものを作る原理が不完全でありながらも完全なものを目指す、成長意欲が欲求の原理なんですよね。

もっともっと成長したい。そういう気持ちが人間の格を作る第2番目の原理であります。

最後の第3番目はですね、人間は社会的存在である。社会を離れては人間は人間にはなり得ない。人間の子供に生まれてきても、小さい頃狼に攫われてしまって人間の脳が狼の習性を覚えてしまったら、もう人間に戻れないんですよね。人間の子供に生まれてきても、人間の社会の中で人間の手によって育てられないと人間は人間にはなれない。人間の子供に生まれてきても、人の顔を着た獣という、そういうことになってしまう可能性は十分にある。

人間は社会的存在であるって言われるんですね。社会の中で生きていく上で一番大事なことは何なのか。社会ってのは、お互いに役に立ち会うっていう関係性で成り立っておりますから、だから人の役に立つ人間になりたい、人に必要とされる人間になりたい、人の役に立つことを喜びとする感性というものが、人間性というものをつくる大事な原理であります。

人の役に立つことが嬉しいという、そういう気持ちはどんな人間にもある。それを違った言葉で言うと、愛ですね。人の役に立つことが嬉しい。この愛が、人間の格を作る第三の最後の原理だと。愛と思いやりである。心遣いである。愛と思いやりを愛である思いやりや心遣いを忘れてしまったら、人間の格をなくしたという風に言っても過言ではない。思いやりや心遣いをなくしてしまって、理性だけで人を非難し、人を責める…そこには人間性というものはかけらもない人間。それは醜い姿だ。たとえ叱る場合でも、そこには思いやりが必要だ。愛が必要だ。例え相手を非難する場合でも、その非難を感情のままではない相手のためを思った叱り方でないといけない。目に愛がある。その愛を相手に感じさせてはじめて人間としての愛ある注意の仕方ということができる。いつも目に愛を忘れず。いつも目に愛の光を。人間は常にその目に愛をたたえていることが大事。感情に任せて、自分を見失ってはならない。

人間であることの証明は愛だ。心遣いや思いやり、そこに自分は人間として生きて、人間として仕事をしているという事の実証がある。これ人間の格を作る第三番目の原理ですね。人間は人間の格を持って生きるためには、謙虚さと成長意欲と愛が必要だ。そして我々は顕著さと成長意欲と愛を、仕事をしながらつくっていく必要がある。なぜなら、謙虚さと成長意欲と愛がない人間は仕事において成功しないからです。仕事において成功する人間は、必ず成功するためにどうしても謙虚さが必要だ。どうしても成長意欲が必要だ。どうして愛が必要だ。人の役に立つことが嬉しいという愛がなかったら、そんな仕事は成功しません。本当に仕事を成功しようと思って、やりはじめたら必然的に謙虚さと成長意欲と愛は、備わってくる。仕事をすることが人格をつくる基本原理、実践だということになるわけですね。我々は仕事で本当に成功するという、そういう仕事の仕方をしたならば、必然的に謙虚さが出てくる、成長意欲が出てくる、そして愛が成長する。そして人間は成功するわけです。そのために我々は仕事を通して、人格を作るというそういう意識を持って仕事はしなきゃならないと思います。

次は、第4番目ですね。問題とは何か？社会に出たら毎日毎日問題ばっかりですよね。仕事をすることは問題を乗り越え続けること。皆さん方も目の前の問題を乗り越え続けてらっしゃるわけですよね。生きるって事は問題をのりこえ続けること。仕事するってことは目の前に突きつけられた問題をクリアしていくことが仕事をすること。

あれ、俺は問題から逃れることはできないもんだ。問題はなんで出てくるのか、もちろん問題とは、人間が不完全であるがゆえに出てくるもんなんですけど、不完全なるがゆえに出てくる問題って何なのか？問題ってものは決して自分を苦しめるために、不幸にするために出てるんじゃない。問題とは全て自分を成長させるためにのみ出てくる。問題は会社を発展させるためにのみ出てくる。問題は社会を良くするために出てくる。これが問題の本質なんですね。なぜならば問題もなかったら人間も社会も会社が発展しません。問題や悩みを乗り越えていくことが人間の成長を、会社の発展、社会の進歩の力になる。原理になる。問題はなければならない。

だから我々は問題を嫌ってはならない、問題が出てこないことを願ってはいけない。出てこないことを願っては、人生から逃げたことになる。経営者が問題が出てこないことを願ったら、経営から逃げたことになる。自分を成長させるために問題を出てくるんだ。その問題から逃げてどうするんや。問題がないことを願うのは安逸を貪り、易きに流れる、楽をしたいだけの人生だ。そこには成長なんてありえない。問題を乗り越えてこそ成長がある。成長するためには問題を乗り越えなければならない。問題を乗り越えなければ新しい力は湧いてこない。成長はしない。

本当の問題っていうのは、今自分の持ってる力でなんともならんってものが本当の問題なんですよね。今の自分の持ってる力で解決できる問題は、それは問題じゃない。もうどうしようもない、万策尽きたっていう問題が本当の問題。万策尽きたという問題にぶつかると。だけど乗り越えていかないとやっていけないっていうことで頑張ってると、そうすると生命に潜在する能力が湧いてきて、そして自分は新しい力を獲得して成長していけるとなるわけですね。成長するためには命から潜在能力が湧いてくるという状態でないと成長しない。成長するためには常に限界への挑戦。不可能を可能にするという作業が必要ですよね。

学校に行っても1年生2年生3年生が4年生また中学・高校と進むごとに、今自分の持ってる力では何ともならん問題に挑戦させられるんですよ。それがなかったら新しい力湧いてきませんからね。人生とまさに毎日毎日限界に挑戦だ。人生はまさに毎日が不可能を可能にする生き方の連続だ。そのことなしには命から新しい能力が湧いてくることはない。

今自分の持ってる力できることしかしてない。今自分の持っている力でできないことはできませんって言ってるよでは、その人には未来はない、成長はない。どんどん時代から遅れて行ってしまう。だけど毎日毎日会社には、新しい時代の要請が舞い込んできて、今自分の持ってる力を超えていかないと会社を存続できないっていう現実がある。仕事をすること自体、毎日毎日本当は限界に挑戦しているんだ。仕事というのは、原理的にはすべて今不可能なことを可能にしていくってことが仕事をするってことの実態だ。その精神なしには会社を発展しない、社員も成長してない。

問題を忘れてはならない。問題が必要なんだ。自分が成長するために問題は必要なんだ。多くの人は早く問題がなくなってもらいたい。早く悩みがなくなってもらいたいと願ってる。それは残念ながら、楽がしたいという思いから出てくるもんなんだ。苦労は嫌だという逃げの人生から出てくるようもの、欲求なんだ。

問題もない、悩みがないところには成長がない。人間は不完全だから問題がないと思っても、それは見えてないだけで、常に問題は誰にでもある。意識している・していないにかかわらず、不完全だから、全ての人に常に問題と悩みはあるんですよね。人間を知るってことは、その人が今持ってる問題と悩みを知ることなんだ。みんな問題と悩みを抱えて生きている。人間の不幸は自分が問題や悩みを抱えているのに誰もそれを知ろうとしてくれないことが、一番の不幸だ。悩みと問題を知ってくれたら、知ってくれたっていうだけで、生きる力が湧いてくるようなもんなんだけど、問題があるのにそれを知ろうとしてくれない…それが最大の人生の不幸であり、悲しみですね。

ついつい問題っていうのは、自分が何とかして助けてあげなくっちゃと思う人が多いんですけど、だけど人の悩みや問題を自分が担いで助けてあげることは、人間を不幸にする間違った行為である。問題は知ってあげるだけで充分であって、問題を乗り越えるのは本人でなければならない。その人の生きる力にならない。うっかり善人根性で助けてあげちゃったりなんかすると、結局その人が自分の力では生きていけない依頼心と依存心を持ったような人間になってしまう。

大事なことはその人が自分の力で問題や悩みを乗り越えていけるように協力してあげることが、周りの人の愛の証であって、余計なお世話をして、その人の問題や悩みを解決してあげちゃったら、相手を生き方において、弱い人間にしてしまう。そういうことになってしまう。

問題や悩みはわかってあげるだけで十分であって、本当にそれはわかってあげたら相手は分かってもらったという満足感で、自分自身で問題にあたる力が湧いてくる。わかろうとしてくれないほど悲しいことはない。人間は不完全だから、問題があることは当然で健全である。問題がない、それは異常なこと。問題がないっていうのは、あるのに見えてない。危険な状態だ。問題あることは健全、どういう問題があるのかを知ってないと会社は危ない。問題を隠して、隠蔽体質を持ったらもう会社終わりだ。風通しを良くして、問題をちゃんとみんなが把握している…こういう問題があってその問題に我々は挑んでいるんだと。そういう認識がある会社は健全な発展を遂げることができる。問題を隠して問題がないと思ったら会社はたちまちにして、倒産の危機に瀕する。問題こそ会社を成長させてくれる原理だ。問題がなかったら会社は成長できない。問題があることは健全なことだ。問題がないことは異常だ。だから問題を恐れてはならないんだ。問題を出てこないことを望んではならない。どんな問題があるかを知ってることが健全な経営だ。

最後の5番目ですね。最後の人生の目的は何か。20歳前後で社会に出て、仕事をし始める…何を目的に仕事をしたら良いのか。生きる究極の目標は何なのか。それを見失わないようにしないと、人生というものに意味を感じなくなってしまう。ただ働いて金を儲けるためでは、人生そのものに意味を感じなくなってしまう。喜びがなくなる人生の究極の目標はなにか。何を目標にして仕事をしたらよいのか。人生の目的とは何か。人生の目的を知ろうと思ったら、人生の根底には生命がある。生命の目的を知ることによって、はじめて人生の目的は何なのかがはっきりわかってくる。

では生命の目的とは？何を目的に生きているのか。あらゆる生命は、自己保存と種族保存のためにしか生きていない。これが生物学上の命の現実であります。全生命に共通する命の目的なんだ。これは人間という命から出てくるとどうなるのか。人間という命から出てくると何になるか、意思になる。イシと言ってもストーンではない、ウィルである。石になって固まってどうする。意思とは、自己実現の力である。自己実現、自己感性、自己創造、本当の自分を作っていく、そのために意思があるんだ。我々はなんのために生まれてくるのか、それは自己実現の人生を生きるために生まれてくるんだ。

だけど、意思にはもうひとつ意味があって、志を意識すると格上げする。本当に意思を実現するという人生を生きるためには、志を持たなければならない。自己実現の人生は自分の理想や夢や希望を実現するのが自己実現の人生だ。志というのは、自分を超えた大いなるもののために自分の命を使う。国家のため、組織のため、人類のため、自分を超えた大いなるものに自分の命を使う、そういう生き方も人間には課せられている。

我々はなんのために生まれてきたのか、自己実現の人生を生きるため。志を持って生きるためにも生まれてきた。もうひとつは、種族保存の欲求は命にはある。人間の命から湧いてくると、愛になる。愛の実現こそ、人間の人生の目的である。

愛を実現するとは、素晴らしい人間関係をたくさん作るってこと。我々の人生の第3番目の目的である。仕事をする上でも、また自分の生活を考える上でも、素晴らしい人間関係をたくさん作らないと、仕事においても成功できないし、また幸せを感じる生活もできない。嫌な人間が増えてきては不幸だ。まず愛の目的は素晴らしい人間関係をたくさん作るところに目的がある。

我々は素晴らしい人間関係をたくさん作るために生きなければならない。

第2にもう一つ大事な目標がある。愛っていうのは男と女が命を交わして、生殖活動をして子孫を残すという活動が愛であります。だから愛というのは、子孫を残す、歴史をつくる。そういう働きが愛にはある。新しい時代をつくる、歴史をつくるという意味を持って、今を生きないといけない。歴史をつくるには、今までの過去の人間がやったことのないことをしないといけない。俺はこの仕事をして歴史をつくるぞ、という職業人の非常に大事な目標でありまし。ただ、今までやってきたことをやり続けていては、人間としての生きがいや意味や価値は出てこない。本当に仕事に意味を感じるためには、この仕事で歴史をつくるんだ、過去の人間がやっていないことをする。そのことにおいてこの仕事を発展させるんだと。それがまた、人間として社会の中で生きる上で大事な目標になる。

自己実現の人生を生きるために生まれてきた。我々は志を持って生きるために生まれてきた。素晴らしい人間関係をつくるために生まれてきたんだ。歴史をつくるために、新しい時代を呼び起こすために生まれてきたんだ。社会を生きるという現実の中で、我々が意識していないといけない大きな課題であります。

今日は新年度に入って、希望を持って仕事をしていくという、そういう中でまず初心に帰って、原点に立ち返って、仕事をするとどういうことなのか、社会の中で仕事をするというのはどういうことなのかってことをもう一度振り返ってもらいたいと思って、今日は社会の中で生きる原則をお話させてもらいました。どうもありがとうございました 。